

ときともいへり、たまくしげ曉名夜中 萬あがつきこめて心也 乞ぎのはねがきなどよめるは、
 たゝあか月ある事なり、ねざめといふおなじ事也、いなのもともいへり稲目とかけ いなひ
 め、いなのも也 萬十に、いなひめのあけ行と云り、これ曉なり、あかつきを、あけがたとはいむ
 べからざるよし、定家説也、

〔日本釋名時上〕曉アカツキ 夜のあけ方、あか時也、つとと相通ず、

〔東雅天文〕晝ヒル 略 中 曉、アカツキといふは、古語にはアカトキといひけり、アカとは開也、トキ

とは時也、天開け明なる時をいふ也、

〔倭訓栞前編〕あかつき 曉をいふ、日本紀に雞明を訓じ、萬葉集には旭時と書り、あかときとも

よめり、明時の義也、新撰字鏡に所をおほあかときとよめり、

〔日本書紀二十〕十九年五月五日、藥獵於菟田野、取アヲ鶏鳴時、集于藤原池上、以アテ會明、乃往之、

〔萬葉集二〕相聞、大津皇子竊下於伊勢神宮上、來時、大伯皇御作歌、

吾勢枯乎、倭邊遺登、佐與深而、鶏鳴露爾、吾立所需之、

〔萬葉集十一〕古今相聞往來歌類、寄物陳思

旭時等、鶏鳴成、縱惠也、思、獨宿夜者、開者雖時、

〔萬葉集十二〕古今相聞往來歌類、寄物陳思

夕月夜、五更闇之、不明見之人、故、戀渡、

〔萬葉集十五〕海邊望月作歌

伊母乎於毛比、伊能禰良延、奴爾安可等、吉能、安左宜理其問理、可里我禰曾奈久、

〔源氏物語五〕若紫、曉がたに成にければ、法花三昧をこなふだうの懺法のこゑ、山おろしにつきて聞
 えくる、